

[韓国渡航参加者聞き取り]

語り手 **遠藤学** × (原稿責任者) 聞き手 **川島章平**

昨年10月19日から29日にかけての10日間、韓国のソウルで行われた韓国住民運動30周年記念ワークショップと、以下は、今回韓国に渡航・滞在した当事者の一人である遠藤学さんのインタビューである。梁山泊の自治会長でもある彼の意見をここに採録する。

川島：まずは韓国滞在全般についてお伺いします。

遠藤：韓国について感じたことは、韓国は生きている、つまり活気があるということです。日を追うごとにそれを感じました。日本では工事もおらず冷えきっていますが、ソウルで車の窓から見えるのは高いクレーンの林でした。

川島：韓国での施設訪問やワークショップで学んだことや感想があればお願いします。

遠藤：韓国の良い点は、貧困者や野宿者に対する資金が政府から出ているということ。援助方法はともかく資金があります。その使い道を工夫すれば日本とは比べ物にならないほど大きなことができます。

川島：ご自分でしたら、どうされますか？

遠藤：コミュニティを動かして発展させます。そして仮に高級マンションに入居してもコミュニティが崩れないような方法を考えます。

川島：ほかに韓国の状況で評価できる点はありますか？

遠藤：ほかに良い点は、政府のシェルターや施設の質が良いということです。また施設を4つ訪問しましたが、女性が明るく強いことを感じました。役職のトップは男性だったのですが、その下で女性が非常に活躍しており、運動をやっていくのは女性であると感じました。

川島：一方で、何か批判点はありましたか？

遠藤：行政権力が入りすぎているということです。たとえば、公園にブルーテントを張ってはだめだということになっています。一番良くないのは、路上生活をするとすぐに警察が来るそうです。

川島：韓国の状況についての見解を伺いました。ワークショップ自体にはどう印象を持ちましたか？

遠藤：期待していたとおりでした。ワークショップの結果が今すぐ何か役立つというわけではないけれども、ほかのアジア諸国の人々と交流できたことは、今後暮らしていく中で自信になっていくと思います。つまり一人ぼっちではなくつながりができたという自信です。

路上生活者が陥りやすいワナは、一人ぼっちであるという感覚に囚われ易いことです。しかしそうではなく、アジアでも非常に多くの人々がホームレス状態です。フィリピンのCOIは、200万人を動員したと言っていました。

また、印象的だったのはインドネシアの女性(名古屋大学に講演しに行くために途中で帰った)です。あんなに痩せているのにどこからパワーが出るのかと思いました。

川島：そろそろワークショップから離れて協同組合についてお伺いします。ヘンダンドンの信用組合を見学したわけですが、そのご感想は？

遠藤：韓国に行くまではお金を集めることはピンと来なかったけれど、なんらかの共済制度は持たなければならないと思って、(月から)「あすなる基金」という貯蓄活動を宮下公園自治会で行ってました。韓国で一番教えられたのは、金額の問題ではなく、お金を通してコミュニティを作ることが大事なのだということです。あすなる基金の目的はここにあると感じました。

川島：信用組合に関する他のご感想や批判点があればお

願います。

遠藤：批判点はまだありません。かといって日本で全面的にとり入れるということではありません。国の事情などが違うということもあつますし。

感想としては、何をするにも最初は資金が必要であるということです。韓国の場合は計画さえしっかりしていればお金が出るのでやりやすいと思います。日本の場合、共済制度は申し込んでも審査が厳しいなど、資金の面では雲泥の差があります。また協同組合を日本で大掛かりにやろうとすると法律が邪魔して出来ません。その点で法律が緩和されている韓国の方がやりやすいといえます。

川島：日本の場合も法律を緩和した方がよいということでしょうか？

遠藤：そうです。

川島：最後にまとめの意味をこめて読者へのメッセージをお願いします。

遠藤：これからは梁山泊を母体に、梁山泊の別組織を作って、就労問題を本格的に取り組みたいと思っています。また梁山泊の自治会の集会所を作り上げたいです。これらふたつが今年の最大の課題です。また、今や順調に梁山泊は内外に認識されていますが、10月から始めた炊き出し(注：「のじれん」)ではない先人数が増えて今週水曜日(注：1月2日)には梁山泊内外から47人来ています。1月に閉鎖したシャワーの代わりに風呂計画も進んでいますので、これからも注目をお願いします。

川島：ありがとうございました。

このインタビューは1月24日(土) 3時30分～4時30分に、宮下公園内の遠藤さんの住居前で行われた。なお誌面に載せるにあたって、補足・修正がなされている。インタビューを快く受けて頂いた遠藤さんに感謝したい。

